



Data

監督・脚本：スジョイ・ゴーシュ
 出演：ヴィディヤー・バーラン/パ
 ラムプラト・チャテルジー
 (ポロムプロト・チョットパ
 ッダエ)/ナワーズツディー
 ン・シッディーキー/インド
 ルニール・セーングプター
 (インドロニル・シェングブ
 ト)/ドリティマーン・チャ
 テルジー (ドリティマーン・チ
 ョットパッダエ)

👁️👁️ みどころ

歌わない、踊らない。『マダム・イン・ニューヨーク』（12年）、『めぐり逢わせのお弁当』（13年）で切り開かれた、そんなインド映画から、更に失踪ミステリーの傑作が誕生！

コルカタのまちの風習とドゥルガー女神祭祀のいわれについての学習が不可欠だが、ヒロインとなる美しき妊婦の行動力を見せつけられれば、それは苦ではないはず。

しかし、弱いはずの妊婦、いたわりの対象であったはずの妊婦が最後にみせる、あっと驚く驚愕の行動とは？これぞ、ネタバレ厳禁。ハリウッドでのリメイク決定も当然と納得できる傑作の誕生に拍手！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ボリウッドに、珠玉の失踪ミステリーものが！■□■

本作のパンフレットの冒頭には、「インド映画と聞けば、誰もが勤善懲悪や悲恋をモチーフにした濃厚なストーリー、過剰なまでにゴージャスな衣装をまとった男女の歌とダンスを連想するが、近年はそのイメージが劇的に変わりつつある。『きっと、うまくいく』『マダム・イン・ニューヨーク』『めぐり逢わせのお弁当』といった“歌わない、踊らない”新世代のインド映画が相次いで大ヒットを記録。文化の違いを超えた普遍的な驚きや感動を呼び起こすこれらの作品が、幅広い世代の日本人の琴線に触れ、インド映画の並外れたクオリティの高さとバリエーションの多彩さへの関心が高まっているのだ」と書かれている。

『シネマルーム33』に収録した『マダム・イン・ニューヨーク』（12年）（『シネマルーム33』38頁参照）も、『めぐり逢わせのお弁当』（13年）（『シネマルーム33』4

5頁参照)も私の採点は星5つだったが、ハリウッド初のスリラーもの、失踪ミステリーものとして登場した本作も私の採点は星5つ。それは、「インド映画の枠を超え、あらゆる観客を虜にする至高の本格派サスペンス・エンターテインメント!」「緻密な伏線、壮大なトリックが予測不可能なサプライズを呼ぶ失踪ミステリーの〈驚愕の真実〉とは?」というパンフレット記載の表現が、本作鑑賞後には必ずしも誇張でないことが実感できるからだ。

さらに、ハリウッド映画に主演する女優は美人であることが大前提。『マダム・イン・ニューヨーク』ではシュリデヴィ、『めぐり逢わせのお弁当』ではニムラト・カウルのベッピンぶりに感心したが、本作ではヴィディヤ・バーランのベッピンぶりに注目!



■□■「コルカタ」ってどこに?■□■

本作の舞台はインドのコルカタ。しかし、それって一体どこにあるの?私を含めて多くの日本人がそう聞いてもわからないのは、去る3月18日、多くの観光客を狙った無差別殺人が起きたチュニジアの首都チュニスと聞いてもわからないのと同じだ。しかし、チュニジアは、かつてハンニバルが率いて、ローマ帝国と覇を争った「カルタゴ」と聞けばわかるし、コルカタは英領時代から2001年まで「カルカッタ」と呼ばれていた都市、と聞けばわかるはずだ。

本作は冒頭、そんなコルカタを舞台に、まるで1995年3月20日に起きたオウム真理教による地下鉄サリン事件を彷彿させる、地下鉄無差別テロ事件が起きるシーンから始まるから、アレレ・・・。

■□■ヒロインは美しき妊婦!その行動力に注目!■□■

本作のヒロインとなる美しき妊婦の名前はヴィディヤ・バグチ(ヴィディヤ・バーラン)。彼女がはるばるロンドンから、1カ月前に行方不明になった夫アルナブ・バグチを捜すために、大きなお腹を揺すりながらコルカタの国際空港に降り立ったところから本作の物語が進行していく。ところが、夫の宿泊先にも勤務先にもアルナブなる人物はいないと聞かされたから、ヴィディヤは途方に暮れることに・・・。そんな美しき妊婦を親切に手伝うのが、コルカタにあるカーリーガート警察署の警察官サトヨキ・“ラナ”・シンハ(パラムブラト・チャテルジー(ポロムプロト・チョットパッダエ))だが、こんなシーンを見ていると、つくづく美人は得だということが実感できる。

それはともかく、インド生まれのインド育ちとはいえ、結婚後は夫と共にロンドンで幸

せな生活を送っていたヴィディヤがたった1人で、コルカタの地で行方不明となった夫アルナブを捜し出すことなど到底不可能と思われたが、本作ではこの美しき妊婦の意外な行動力に注目！

■□■本作も、「瓜二つ」が大きなポイントに・・・■□■

「瓜二つ」とか「そっくりさん」をめぐる映画は多い。『チェイス!』(13年)は、双子の兄弟であることをあっと驚くストーリーの要因としたエンタメ巨編だった。それに対して本作では、ヴィディヤの夫アルナブが、2年前の地下鉄無差別テロ事件とかかわりがあるらしい謎の危険人物ミラン・ダムジ(インドルニール・セングプター(インドロニール・シェングプト))と瓜二つの風貌を持っていたことから、何らかの事件に巻き込まれたのだろう、というストーリーが進行していく。

人は良さそうだが全く頼りなさそうな警察官ラナに対して、デリーの国家情報局司令本部次長のA.カーン(ナワーズブディーン・シッディーキー)はいつも怒鳴り散らしている威丈高な男だが、能力は折り紙つきらしい。したがって、カーンは、自らの危険を省みず夫捜しのために突き進んでいくヴィディヤを、自分の目的達成のためにうまく利用しようとしていることがミエミエだが、ヴィディヤはそんなことはおかまいなしにまっすぐら・・・。

しかし、表面上は保険会社の無能社員を装いながら、ウラで殺し屋稼業を請け負っているボブ(シャーシュワト・チャテルジー(シャッシュト・チャタルジ))の手によって、駅から転落死させられる危険を現実に見せつけられると、さすがに・・・。いやいや、女の、とりわけ妊婦の強さはそんなものではない・・・？

■□■女神とは？ドゥルガー女神祭祀とは？■□■

東部インドの大都市コルカタは、ベンガル湾を抱く世界最大のデルタ地帯の西に位置しているようだ。そして、そこで使われる言葉は英語の他、ヒンディー語やベンガル語が入り混じっており、その発音は微妙に違うらしい。さらに、人の名前についても「愛称」と「本名」の2つがあるそうだから、とにかくややこしい。そして、それらが本作ラストの「あっと驚く」結末の伏線になっているから、最新の注意を持って本作のストーリーを追う必要がある。

他方、本作のストーリーはベンガル最大の祭り「ドゥルガー女神祭祀」と共に進行していくが、そもそもドゥルガー女神とはナニ？また、「ドゥルガー女神祭祀」とは一体ナニ？私たちを含む多くの日本人はそれがわからないから、本作を鑑賞するについては、パンフレットにある澁谷俊樹氏(インドお祭り研究家)の「REVIEW」を読むことが不可欠だ。ネタバレとなるため、ここではその説明はしないが、そもそも「女神の二つの貌」とは？それがわからなければきっとタイトルの意味もわからないはずだ。したがって、この

解説を熟読したうえで、コルカタのまちを大いに盛り上げる「ドゥルガー女神祭祀」のダイナミックさを十分に堪能したい。

■□■壮大なトリックに唖然！驚愕の事実唖然！■□■

女は弱いもの。とりわけ、妊婦ともなれば何かと大変だから、周りの人は親切にしてあげるべき対象。マナーの先進国である日本では、そんな公衆道徳の教えが行き届いているが、さてインドでは？それはインドでも同じようで、当初は困惑気味にヴィディヤを迎えたホテルの支配人も、カーリーガート警察署の警察官ラナの上司チャテルジー（カラージ・ムケルジー（コラジ・ムコッパッダエ））からの指示を受けてのこととはいえ、夫捜しに機敏に動き回るヴィディヤのために何かと協力する警官ラナも、妊婦のためともあれば、何かと親切だ。さらに、ストーリーの途中からはヴィディヤの「盟友」となるホテルの下働きの少年ビシュヌ（リトブラト・ムケルジー）やお茶屋の配達少年ポルトウ（リッディ・セーン）も登場し、節目節目で大きな役割を果たしていくことになる。



もっとも本作中盤、殺し屋のボブに命を狙われたことを知り、その恐怖に打ち震えているヴィディヤの姿をみると、夫捜しの執念もそれまでか、と一瞬思われたが、それでは「女神」が廃るといふものだ。本作後半には、デリーの国家情報局指令本部長バースカラン・K.（ドリティマーン・チャテルジー（ドリティマン・チョットパッダエ））やデリーの国家情報局の元職員プラターブ・バジパイ（ダルシヤン・ジャリーワラー）も登場し、地下鉄無差別テロ事件の犯人捜しの様子が語られていくが、それとアルナブ失踪事件とはいかなる接点か・・・？一介の主婦にすぎないヴィディヤが危機一髪の事態に際してなぜ拳銃の引き金を引くことができたのか、は少し不思議だが、スリルとサスペンスに富んだ追跡劇の中でのそれは一瞬の流れで起きるから、違和感はない。しかし、そんなあなたでも、本作ラストの仕掛けにはあっと驚くはずだ。

このように、本作ラストで明らかにされる、ヴィディヤのあっと驚く行動とそこに秘められたしたたかな計算も、「ドゥルガー女神祭祀」を前提としたものであることに気づけば、パンフレット冒頭に書いてある「緻密な伏線、壮大なトリックが予測不可能なサプライズと呼ぶ失踪ミステリーの＜驚愕の事実＞とは？」が決して誇張ではないことに、あなたも納得するはずだ。ボリウッド初の珠玉の失踪ミステリーは必見！ハリウッドでのリメイク決定も当然と納得！

2015（平成27）年3月24日記